

(注2) 片桐洋一編集 新注和歌文学叢書4 『海人手子良集 本院侍従集 義孝集新注』

二〇一〇年・青簡舎 項目執筆三木麻子。

(注3) 『あめつちの心―伏見院御歌評釈』笠間書院・一九七九年。後伏見院兵衛督については、『京極派歌人の研究』昭和四九年・笠間書院 第三章第五節に詳しい。

(注4) 上野英二「源氏物語と長恨歌 其二・其三」『成城国文学論集』三六・二〇一四年。

(注5) 静永健(「翻・複」高松宮伝来書籍等を中心とする漢籍読書の歴史とその本文に関する研究) 国立歴史民俗博物館研究報告198・二〇一五年、静永健「中国からやってきた書物たち―唐の詩人白楽天の詩巻を中心に―」『歴博』178・二〇一三年。

〔付記〕この研究は「中世における漢故事のパラフレーズ」(科学研究費基盤研究(C)、研究課題16k02379)の成果の一部である。

するところにある。主情的に自然をとらえることは和歌の特色であるが、ここでは自分だけでないすべてのものが秋の訪れを悲しむるところに、単なる悲秋とはいえない要素がある。

#### 四、まとめ

以上、拙著の補足と修正として、伏見院の悲秋歌である『玉葉集』四六三番歌の解釈について述べてきた。結論からいえば、当該歌は表現のレベルでも、内容のレベルでも、漢詩文の世界から強い影響を受けているといえる。また、「露くだる」の解釈は、「くだる」の表現から、「天から降る涙」とも捉えられうると考える。当該歌は、院が自らの詠草を編纂した『伏見院御集』の断簡、「広沢切」（書陵部蔵本）の配列、

#### 秋露「二二」

我もかなし草木も心いたむらし秋風ふれて露くだる比（二二〇五）

草木みな露をふくめり我ひとり秋につれなき袖ならめやは（二二〇六）

ちぐさみだれ花の色・ちりしほれ野分のかぜのあとぞあれたる

（二二〇七）

みだれあふちぐさの末は露にふしてまだよるちかき明ほのゝ庭

（二二〇八）

秋といへば草木露けみ吹かせの身にしむ時に物ぞかなしき（二二〇九）

あきの日のうへにくだれる色みれば心もよほくものぞかなしき

（二二一〇）

秋のよのね覚のまどやふけぬらんすだれをのぼる在明の月（二二一一）

あきはこれもろぎあはれの時にあれや草木の露も人の涙も（二二一二）

#### 以下略

「秋露」の歌群にまとめられた中に入れられていることから、まず、第一に悲秋の歌として詠まれたと考えるべきではあろう。しかしながら、その背景には、七夕の男女の別れや、『長恨歌』の詩句の、愛する人に死に別れた悲しみなども挿入されていることを、十分に考慮しながら読むべきであると考える。

また、本稿で語の表現について分析する中で、伏見院の和歌表現には漢文訓読調のものが多く含まれており、それが歌境にまで影響を及ぼしていることが想定できた。今後は、こうした漢文訓読や、古典化した漢詩句がどのように伏見院の和歌に取り入れられ、どのような歌境を作っているかを、更に検討したい。

#### 〔注〕

※ 和歌の本文は、特に記さない限りは以下の通りである。勅撰和歌集のものは本文・歌番号ともに『国歌大観』に拠った。私家集のものは本文・歌番号ともに『私家集大成』に拠り、濁点は私に符した。『和漢朗詠集』は、新潮日本古典集成（大曾根章介・堀内秀晃校注）に拠った。『長恨歌』は、『統国訳漢文大成 白楽天詩集 第二巻』（佐久間節訳、日本図書センター、一九七八年）に拠った。

（注一）中川博夫『玉葉和歌集（上）』（明治書院）の補注では、作者類歌として、『伏見院御集』の、

秋にいたむ風のころをよもにうけてふるゝ草木はみなしほれけり（八四八）

ふきからすよもの草木のころまでなべてかなしき秋かせのころ（九一五）

草木みな露をふくめり我ひとり秋につれなき袖ならめやは（二二〇六）

をあげる。

では「いたむ」は、通常、

冷泉院春宮と申しける時、百首歌たてまつりけるによめる

かぜをいたみはうつなみのおのれのみくだけでものおもふころかな

(詞花集・二二一・恋上・源重之)

のように、風に対して用いることが多い。『万葉集』に、当該歌の表現と同じ発想のものとして、心が「いた」むとするものがある。

讃岐国の安益郡あやのこほりに幸す時に、こにきしのおほきみ軍王、山を見て作る歌

霞立つ 長き春日の 暮れにける わづきも知らず むらぎもの 心を痛  
みぬえこ鳥 うらなけ居れば 玉だすき かけのよろしく 遠つ神 我  
が大君の 行幸の 山越す風の ひとり居る 我が衣手に 朝夕に かへ  
らひぬれば(以下略)

幸<sub>二</sub>讃岐国安益郡<sub>一</sub>之時、軍王見<sub>レ</sub>山作歌

霞立 長春日乃 晩家流 和豆肝之良受 村肝乃 心乎痛見 奴要子鳥  
卜歎居者 珠手次 懸乃宜久遠神 吾大王乃 行幸能 山越風乃 独座  
吾衣手尔 朝夕尔 還比奴礼婆 (以下略)(万葉集・五・卷一)

穂積皇子の御歌二首

今朝の朝明 雁が音聞きつ 春日山 もみちにけらし 我が心痛し

今朝之旦開 雁之鳴聞都 春日山 黄葉家良思 吾情痛之

(万葉集・一五二三・卷八・秋雑歌)

小学館古典文学全集(小島憲之・木下正俊・佐竹昭広校注)では五番歌の頭注に「心を痛み―名詞十ヲ十形容詞語幹はミ語法と呼ばれ、くがくなので、という意を表す。心痛シは胸が締めつけられるように苦しいこと」とあり、この「心を痛

み」も、終止形であれば「心を痛し」となる。『時代別国語大辞典』(上代篇)では「いたむ」の考察の項目で、

従来、イタムの例とされていた万葉の「そ思ふに胸こそ痛」(四六六)「そ

こ思へば胸こそ痛」(一六二九)を、「そ思へば心し伊多思」(万四〇〇七)

「衣こそ二重予者」(仁徳紀二二年)「己が妻こそ常目頼次吉」(万二六五

一)「最も今こそ恋はずべ無寸」(万二七八一)「草こそ之既吉」(万四〇〇

一)「一」などにならつて「痛」と訓むと、イタムの例は古訓のみとなる。

と述べ、「いたむ」という語は、仮名訓になかったことを指摘する。『万葉集』一

五二三番歌は、京極派の勅撰集『風雅集』秋中・五五二番歌にも入集するが、こ

こでも結句は「我が心いたし」であり、「心いたむ」が和歌には用いられない表現

であったと考えられる。

また、『和漢朗詠集』の秋の詩句を引用してみると、

物の色は自ら客の意を傷ましむるに堪へたり 宜なり愁の字をもて秋の心  
に作れると

物色自堪傷客意 宜將愁字作秋心 (二二四・卷上・秋興・野)

第一に心を傷ましむることは何れの処か最なる 竹風葉を鳴らす月の明ら

かなる前

第一傷心何処最 竹風鳴葉月明前 白

(二二六・卷上・秋興・田達音)

のように、心が「いたむ」という表現が定着していることがわかる。当該歌の「心いたむ」とは、漢文訓詁調の表現と捉えられるのである。「心傷む」は、悲秋の詩句にも常套的に用いられていることから、この和歌がまず悲秋の表現に基づくこととは確実であろう。この和歌の新しさは、秋の訪れに草木も胸を痛めている、と

歌とする。先述したように、この「幻」の巻は、最愛の紫の上に先立たれた光源氏が、四季の景物に触れるにつけて彼女を思いだして悲しむという記述が主になっている。この巻については、唐の詩人白楽天の『長恨歌』の、楊貴妃を失くした玄宗皇帝の悲しみを下敷きにしていることが指摘されている<sup>(注4)</sup>。七夕については、『長恨歌』では、楊貴妃が存命中に七夕の日に玄宗皇帝と誓ったと道士に話す、

七月七日長生殿、夜半無人私語時。

在<sup>レ</sup>天願作<sup>二</sup>比翼鳥<sup>一</sup>、在<sup>レ</sup>地願為<sup>二</sup>連理枝<sup>一</sup>。

(七月七日長生殿、夜半人無く私語の時。天に在<sup>レ</sup>つては願くは比翼の鳥となり、地に在<sup>レ</sup>つては願くは連理の枝とならん。)

が有名であるが、「幻」の七夕の場面では、ことばのレベルで右の詩句を踏まえてはいない。しかしながら、四季の季節の移ろいの中で、愛する人を失った悲しみというひしがれる主人公という設定は、まさしく『長恨歌』を踏まえたものである。

春風桃李花開夜、秋雨梧桐葉落時。西宮南内多<sup>二</sup>秋草<sup>一</sup>、宮葉滿<sup>レ</sup>階紅不<sup>レ</sup>掃。

〔中略〕

夕殿螢飛思悄然、孤燈挑盡未<sup>レ</sup>成眠。遲遲鐘鼓初長夜、耿耿星河欲<sup>レ</sup>曙天。

鴛鴦瓦冷霜華重、翡翠衾寒誰與共。

(春風桃李花開く夜、秋雨梧桐葉落つる時。西宮南内秋草多く、宮葉階に満

ち紅掃はず。〔中略〕

夕殿螢飛んで思悄然、孤燈挑げ盡して未だ眠りを成さず。遅遅たる鐘鼓初めて長き夜、耿耿たる星河曙けんと欲する天。

鴛鴦の瓦は冷やかにして霜華重く、翡翠の衾は寒うして誰と共にせん。)

『長恨歌』通行本の本文を掲げると右のようであるが、傍線部の箇所については、日本に伝わった本文が当初、異なっていたことが、『和漢朗詠集』に残る詩句などによってわかる。そのうち、本稿に直接関わる箇所、「秋雨梧桐葉落時」については、『和漢朗詠集』や伏見院皇子の尊円法親王筆『長恨歌』などによって、次のようであったことがわかっている。

春の風に桃李の花の開くる日 秋の露に梧桐の葉の落つる時

春風桃李花開日 秋露梧桐葉落時 同

(和漢朗詠集七八〇・卷下・恋・同じ〔白〕)

通行本『長恨歌』では「秋雨梧桐葉落時」とあるところ、古い本文では「秋露梧桐葉落時」であったらしい。伏見院皇子の尊円法親王筆「長恨歌」も、「露」とする。これは金沢文庫本より古い、旧鈔本に基づいて書写したものと考えられている<sup>(注5)</sup>。

古い本文では、秋が来て、草木に露が降りて桐の葉が落ちるといふさまを詠むことになり、草木に降りる露が秋の到来を感じさせる景物として扱われていることが読み取れる。しかもこの詩句は、『和漢朗詠集』で「恋」の部に入っている。『和漢朗詠集』入集の詩句は、よく愛誦されたものであり、右の詩句は有名な『長恨歌』の詩句でもあることから、当然、平安・鎌倉期の歌人たちには、この詩句が、季節の移ろいから愛する人のいない喪失を嘆いたものとして認識されたと考えられる。

七夕の歌群の前に配列され、露が降りることによって、詠歌主体が秋の訪れを知り、悲しむことを詠んだ当該歌にも、『長恨歌』の「秋露梧桐葉の落つる時」が意識されているといえるのではないか。

ここで和歌の解釈に関わる重要な表現として、「心いたむ」に注目したい。和歌

草木のみの涙ではなく、やはり天も悲しんでいると解釈すべきである。

先に少し触れたように、当該歌は、『玉葉集』では、七夕の歌の前に配列されている。煩雑を厭わず、前後数首の配列を示せば下記のようになる。

四六〇 人よりもわきて露けき袂かなわがためにくる秋にはあらねど  
(前大僧正道玄)

四六一 秋のきてけふみか月の雲まより心づくしのかげぞほのめく

(早秋の心を・常磐井入道前太政大臣)

四六二 秋にこそまたなりぬれと思ふより心にはやくそふあはれかな

(従三位親子)

四六三 われもかなし草木も心いたむらし秋風ふれて露くだる比

(五十番歌合に秋露をよませ給うける・院御製)

四六四 久方の雲はるかに待ちわびしあまつほしあひの秋もきにけり

(弘長百首歌に七夕を・前大納言為家)

四六五 ひこほしのつま恋衣こよひだに袖の露ほせ秋のはつかぜ

(おなじ心を・平為時)

秋の来たことに気づく歌、そこから秋の到来を悲しむ当該歌に繋いだあとで、七夕の歌へと続いている。『源氏物語』「幻」(本文は小学館新編日本古典文学全集に拠る)で、最愛の紫の上に死なれた光源氏が、七夕に感慨を催す場面で、

七月七日も、例に変わりたること多く、御遊びなどもしたまはで、つれづれにながめ暮らしたまひて、星逢ひ見る人もなし。まだ夜深う、一とこころ起きたまひて、妻戸押し開けたまへるに、前裁の露いとしげく、渡殿の戸よりとほりて見わたさるれば、出でたまひて、

七夕の逢ふ瀬は雲のよそに見てわかれの庭に露ぞおきそふ

と、彦星と織姫の別れの涙から想起して、紫の上を恋い慕う自分の涙に露を見立てる和歌が見られる。このように、七夕には、彦星と織姫の涙になぞらえて、露がよく詠まれた。

中村氏は、「露くだる」との表現に、『礼記』月令「孟秋之月」の記述、

涼風至、白露降、寒蟬鳴、鷹乃祭<sub>レ</sub>鳥

を直接の典拠とすることを指摘する。中村氏が「降」の訓点が「クタル」であったと指摘するように、「露くだる」という表現自体には、漢文訓読からの影響が認められるであろう。しかしながら、この『礼記』の記述から、当該歌を、単純に悲秋をテーマとしたものに過ぎないと解釈する中村氏の主張が妥当かどうかは判断が難しいと考える。

三、「心いたむ」の解釈について

当該歌について、岩佐美代子氏は、「心いたむ」の表現や、七夕歌の直前にこの歌が配されていることから『玉葉集』成立以前の正和以前に亡くなったと考えられる伏見院の愛妾、後伏見院兵衛督を失った悲しみが投影されているとする<sup>(注3)</sup>。

伏見院には、七夕の頃に、愛する人を失った悲しみを詠んだ和歌が散見する。

秋のはじめつかた、ちかくさぶらひなれたる人の身まかりにければ  
伏見院御歌

ひこほしのあふてふ秋はうたてわれ人にわかるる時にぞありける

(風雅集・一九八八・雑下)

ほしあひはくものよそにてめのまへのわかれを人になげくころかな

(伏見院御集・三八〇・七夕)

第二首目については、先ほど引用した、『源氏物語』「幻」での源氏の和歌を本

葉集』四六三番歌と『礼記』月令』(『京都大学国文学論叢』28 二〇一二年)において、当該歌が「悲秋」であることについては妥当とされたうえで、下記のような指摘をされた。

この場合、「露」を天の涙とするのは当たらないように思う。「空からこぼれ落ちた露が草や木に宿り、それがあたかも(草木の)涙のように見える」と解釈したほうが、類想歌の内容から言っても、より自然ではないだろうか。

中村氏は、伏見院の和歌に、

草木みな露をふくめり我ひとり秋につれなき袖ならめやは

(伏見院御集・二二〇六・秋露)

秋の風は草木のつゆに吹きしほり(うれ)にふれても涙をぞなす

(伏見院御集・二三二九・秋)

のような、「秋の悲しみが、人間においては涙としてあらわれ、草木においては露となる」という類想歌が多く見られる(注1)ことから、当該歌の草木の露も、「草木の涙として描かれている可能性は高い」とする。たしかに、伏見院には、

あきはこれもろきあはれの時にあれや草木の露も人の涙も

(伏見院御集・二二二二・秋露)

のように草木の露を人の涙と対応させた例もある。当該歌の第二・三句「草木も心いたむらし」から考えても、秋の到来を草木も悲しんでの涙が露である、と解釈する方が、たしかに自然ではあろう。拙著を執筆した際も当初はどのように考えたか、天の涙としたのは、結句の「露くだる」の表現や、当該歌が『玉葉和歌集』では七夕の和歌の前に配列されていることからである。

『日本国語大辞典』(小学館)では、「くだす」(下・降)について、「天、空などから下の方へ移す。雨などを降らす」とある。すでに中村論文で指摘があるよう

に、通常、和歌では、露は「置く」「結ぶ」と表現され、「くだる」と表現する例は少ない。当該歌に先行するものでは二例あげられる。

露くだす星合の空を詠めつつかでことしの秋をすぐさむ

(夫木抄三九九八・秋一家集、秋歌中 藤原義孝)

雨おもき籬の竹のおれかへりくだればのぼる露のしら玉

(為家集・二〇八三・雨中緑竹)

二首目については、中村論文でも指摘されているように、天から降ってくる露のことを詠むのではない。竹が雨の重みで曲がれば竹についた露も枝先に向かつて流れ、竹がもとに戻ればそれにつれて露も下の根本の方向へと伝って流れる。竹が曲がったり元に戻ったりという動作を繰り返すと、露も枝先に流れたり根本の方向に流れたりと忙しいさまを表す。中村氏の「雨の重みで竹がしだれているために、露は枝の先端へと流れてゆく。露がくだるように見えても、実は枝をのぼっている」という解釈は一部修正を要する。

一首目は、『義孝集』五では、初句「露くだる」であるが、これは、冷泉家時雨亭文庫本の本文系統から、「露くだす」であると考えられるという(注2)。七夕の夜、彦星と織姫の涙のような露を天が降らすと詠む。同様の発想は、漢詩文にもある。

露は別涙なるべし珠空しく落つ 雲はこれ残粧髻いまだ成らず

露応別涙珠空落 雲是残粧髻未成

(和漢朗詠集・二二四・卷上・七夕・菅)

天が降らせた露は彦星と織姫の別れを惜しむ涙なのだろうと詠む。当該歌は、露が「くだる」のであるから、やはり露が天から下りてくる様を表すと解釈すべきであり、それが草木に降りて、結果として草木の涙のようにみえると、とらえることも可能である。だが、義孝の和歌や和漢朗詠集の七夕の詩句からすれば、

## 伏見院の悲秋歌の解釈について

### About interpretation of "Hushimin's Waka"

#### mourning Fall

#### 阿尾あすか

キーワード：伏見院 悲秋 七夕 和漢朗詠集 長恨歌

#### 一、伏見院の悲秋歌

鎌倉時代後期の天皇、伏見天皇（以下、呼称を院号である伏見院に統一）は、中世和歌に新風を吹き込んだといわれる歌道の流派、京極派和歌を代表する歌人として知られる。伏見院の代表歌の一つに、秋の到来を悲しむ次のような和歌がある。

われもかなし草木も心いたむらし秋風ふれて露くだる比

（玉葉和歌集四六三・秋上・五十番歌合に秋露をよませ給うける）

京極派歌壇で編纂された勅撰和歌集『玉葉和歌集』（以下、『玉葉集』）入集のこの歌は、乾元二年（一三〇三）閏四月二十九日催行の『五十番歌合』に出詠された歌で、京極派歌壇の指導者、京極為兼の歌と番われている。この和歌について、判者でもあった為兼は、「心詞たくみにして隔凡俗之界」（和歌の内容、表現いずれも優れ、凡人の域を遠く隔てている）と評し、絶賛した。

かつて、私は、拙著『コレクション日本歌人選 伏見院』（笠間書院・二〇一一年）にて、この歌に、次のような口語訳と解説を加えた。以下、煩雑ではあるが、口語訳は全文、解説は主要な部分を引用する。

口語訳：

私も悲しい。草木も心を傷めているようだ。秋風が吹いて草木に触れ、また、その秋を悲しむ天から、涙のような露が草木へこぼれ落ちてくる頃は。

解説：

「悲秋」という言葉がある。万物が枯れ、冬の衰退へと向かう秋は、悲哀の情をかきたてる。今から見れば、当たり前のことのようだが、『万葉集』では、草木が紅葉し彩りを見せる秋は、春と甲乙つけがたい美しい季節として捉えられた。秋を悲しいものと思うのは、平安時代に漢詩から影響を受けた後の発想であった。

この歌も、「悲秋」の発想に基づいている。すべてが衰退へと向かう秋を、自分が悲しんでいるように、草木も秋の到来を悲しんでいるせいか、秋風と露に退色して、やがて枯れ落ちてゆく。漢詩にも、「悲シキ哉、秋ノ氣為ル。蕭瑟トシテ草木揺落シテ衰哀ス」、「秋風蕭瑟トシテ天氣涼シ。草木揺落シテ露ハ霜ト為ル。：君方客遊ヲ思ヒ腸ヲ断ツ」などあるように、秋の到来は、秋風と露霜に弱り、枯れ落ちる草木の様子によって、認識されるものであった。この歌では、作者も、草木も、涙のような露を降らせる天も、皆が秋を悲しんでいるという。

この和歌（以下、当該歌）が、秋の訪れを悲しむ「悲秋」の発想に基づくものとの私の見解は、現在も変わっておらず、他の評釈や論文を見てもそれが妥当と考える。しかしながら、この和歌の細部の表現については、まだ検討の余地がある。本稿では、拙著での解釈の補足と修正を試みる。

#### 二、「露くだる」の解釈について

第一節での拙著の口語訳と解説について、中村健史氏は、「伏見院の悲秋歌・『玉